

本書を出版した趣旨について、寄稿いただいた著者への依頼文を以下にお示しし、まえがきといたします。

2023年1月に上梓した『希望の共産党 期待こめた提案』(有田芳生、池田香代子、内田樹、木戸衛一、佐々木寛、津田大介、中北浩爾、中沢けい、浜矩子、古谷経衡・著)の続編として、共著者をあらたにして、2023年統一地方選挙後、きたる総選挙に向けて日本共産党と共に政治変革を実現するための課題をそれぞれの視点から寄稿いただきます。

前作では、主に党首公選制をはじめ党内の活発な論議を可視化させて「市民と野党の共闘」を発展させる期待についてご寄稿いただきました。しかし、その後の同党をめぐる状況はメディアでも取り上げられ周知のとおり、日本共産党執行部は持論を著書にした松竹伸幸氏や鈴木元氏を除名処分にするなど、市民に開かれた民主主義的ではない頑なな「革命政党」というイメージが沈殿されてしまい、「130%の党」づくりを目標にしたものの、統一地方選挙では現有議席を大幅に減らし、しんぶん赤旗も数万部の減紙、党員数も死亡・離党者を上回る入党者を得られず、存亡の危機にあると想像されます。

他方、野党第一党の立憲民主党も結党時のような「ボトムアップの政治」による自民党への対抗勢力としての魅力を失い、野党との選挙協力を党首が否定し「市民と野党の共闘」の道も閉ざされかねない状況にあります。新自由主義的な「身を切る改革」を標榜する日本維新の会が統一地方選挙でも大幅議席増となったのと対照的に、左派リベラルな「立憲野党」の後退が憂慮されます。

それゆえ、日本共産党の減退ないし混迷は日本の政治変革にとっての危機とも言えるのではないのでしょうか。だからこそ、日本共産党の再生を願って自己改革を期待するための提言を急遽企画いたしました。

本企画は前作と同様に、著者それぞれの持論を自由に述べていただき、集団としてまとめた提言書とはいたしません。多様な意見を出し合うことで、日本政治の危機を日本共産党と共に乗り越えていく一助にたく存じます。

2023年7月15日 あけび書房代表 岡林信一